

“ 卷頭言 ”

小児は発達の途上にあり，診断や治療の適切な時期を逃すと，その後の視機能や生活の質に大きな影響を及ぼす可能性がある。したがって，迅速かつ正確な診断，そして個々の発達段階に応じた治療選択がきわめて重要となる。

本臨時増刊号では，角結膜，白内障・屈折，近視，緑内障，網膜硝子体，ぶどう膜炎，眼瞼・眼窩・腫瘍，斜視・弱視・神経眼科，さらにはロービジョンケアや病診連携に至るまで，小児眼科領域を幅広く網羅し，第一線で活躍されている専門家の先生方に最新の知見をまとめていただいた。取り上げられたテーマはいずれも日常臨床で直面する頻度が高く，また近年急速に進歩した診断や治療が多く含まれている。

近視の抑制治療や小児緑内障に対する新しいアプローチ，遺伝性網膜疾患に対する診断・治療の進展，未熟児網膜症の管理などは，その代表例である。さらに，小児ぶどう膜炎や小児の腫瘍など，治療選択や副作用管理に専門的知識を要する分野についても詳細に解説されており，若手医師からベテランまで臨床現場で直ちに役立つ内容となっている。

また，近年注目される小児近視の増加や，ロービジョン児に対する教育・支援体制，病診連携の在り方など，医療のみならず社会的な観点からも重要な課題が取り上げられている点は特筆すべきである。小児眼科は単に眼科医の技術や知識にとどまらず，教育，福祉，家族支援とも密接に関わっており，多職種連携の重要性を改めて感じさせられる。

本号を通じて，小児眼科領域における診断と治療の「最近の進歩」を俯瞰することで，日常診療の質が向上し，ひいては小児の視機能と生活の質の改善に直結することを期待している。小児期の一人ひとりの視覚体験が，その後の人生を豊かに形づくることを考えると，この分野の責務と意義は極めて大きい。本誌がその一助となれば幸いである。

2025 年 9 月
『眼科』編集委員会
根岸一乃・記